

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

移動の物質的側面を追って＜共同研究：
モビリティと物質性的人类学＞

メタデータ	言語: ja 出版者: National Museum of Ethnology 公開日: 2020-03-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 古川, 不可知 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00009502

移動の物質的側面を追って

文・写真 古川 不可知

いわゆるグローバル化の進行にともなって、人びとの移動はますますその頻度と多様性を増している。ビジネスや観光のために、あるいは移民や難民として無数の人びとが地球上を動きまわり、生業活動や巡礼といった既存の移動様式もまた新たな輸送技術の導入によって変容してゆく。

移動を研究することの重要性は人文社会科学のなかで幾度となく指摘されており、ジョン・アーリは移動を社会活動の中心として捉える研究パラダイムを「移動論的転回」と名付けた（アーリ 2015）。だがこれまでマクロな現象としての移動についてはさまざまに論じられてきたものの、個別の身体を持った人びとが具体的にどのように移動してゆくのか、いかなる物理的構造がそうした移動を可能としているのか、また移動は身体や環境にいかなる痕跡を残すのかといった、移動の過程にともなって生じる人とモノや環境とのかかわりについては十分に考究されてきたとは言い難い。

2019年10月にスタートした本共同研究の目的は、世界各地を移動する人びとのさまざまな実践について、その物質的な側面を焦点化しつつ比較分析することにある。

ネパール山間部の移動—着想の契機

本稿執筆時の2019年10月時点ではまだ研究会の開催前であるため、ここでは筆者のフィールド経験から着想の契機を示しておきたい。

筆者が調査をおこなってきたネパール東部のソルクンプ郡は、エベレストの南麓にあたるトレッキング／登山観光の名

所として知られる。険しい山岳地帯であるこの地域には、世界各地から年間3万人を超える観光客が訪れ、ネパール各地からもガイドやポーターといった職を求めて人びとが参集する。観光客は首都カトマンズから山中に開かれた小さな飛行場へと飛び、そこからエベレスト・ベースキャンプをはじめとする目的地に歩いて向かう。

エベレスト地域の観光にかかわる人びとの移動をめぐるこうした一般的な説明は、事実ではあるものの現地のリアリティを捉えているとは言い難い。われわれは単に地点から地点へと飛び移るのではなく、高山の空気の薄さにあえぎつつ、土砂崩れや積雪によって姿を変える山道の上を、靴底やストックの先でその質感を感じながら歩いてゆくのである。

さらに山間部では、車道もまた天候の変化に応じて形状を変え、土砂崩れやぬかるみは車両の通行を妨げる。運転手は揺れや音で路面を感じ、乗客が総出で車体を押ししたりしながら山中を移動してゆく。そしてたとえ飛行機に乗って調査地に向かうときであっても、それはモノとの相互作用を欠いた時間ではなく、シートの弾力を感じ、乱気流のなかで不意に空気の流を感じるというように、個々の身体は機械を介していようと常に環境との接続を保っている。本共同研究が検討の対象とするのは、一般には看過されがちな、移動のプロセスにおけるこのような物質的側面である。

身体・インフラストラクチャー・マテリアリティ

本研究では、移動の物質的側面を3層のレイヤーから分析することを検討している。すなわち、移動する個々の身体、移動を可能とするインフラストラクチャー、および移動者と関係を取り持つモノのマテリアリティである。本研究ではこれらを包括して物質性と呼んでいる。

ここで重要なのは、それぞれのレイヤーは明確に分かたれるわけではないことである。山を歩くときに身体と装備と山道のあいだにはっきりとした境界がないように、それぞれのレイヤーは相互に浸透しあう。あるいは乗合ジープの運転手にとっては拡張された身体である車体が、乗客にとってはインフラであるというように、状況や観点に応じてその位置づけは変化するだろう。



山道を歩く観光客（2016年10月26日、ネパール・ソルクンプ郡）。

古川 不可知（ふるかわ ふかち）

国立民族学博物館学術資源研究開発センター機関研究員。専門は文化人類学、ヒマラヤ地域研究。著書に『「シェルパ」と道の人類学』（亜紀書房 2020年）、共訳書『ソウル・ハンターズ—シベリア・ユカギールのアニミズムの人類学』（亜紀書房 2018年）などがある。

移動と滞留への参与

本共同研究では移動する人びとについてゆくことを基本的な方法論とし、移動者と同じ視線から、現地の概念を通して、移動という実践を理解することを試みる。世界のさまざまな地域や環境を移動する人びとの具体的な事例は、現代西欧の都市域を中心におこなわれてきたモビリティ研究に新たな光を当てることになる。加えて、既存の研究では暗黙の裡に普遍的なものともみなされてきた道やインフラといった概念を、現地の概念を通して再考してゆくことになるだろう。

ただし移動の可能性は、万人に対して平等にもたらされるわけではない。ある者は世界中を飛び回る一方、別の者はその意図に反して滞留を余儀なくされる。国家は遊動する人びとに定着を強制し、移民や難民の経路を制約して移動を管理しようとするだろう。また複雑にネットワーク化された輸送インフラは、1点のほころびによって思わぬ場所に人びとを留めおくことになるだろう。滞留する人びとはその土地にキャンプの跡といった物質的な痕跡を残したのち（ハミラキス 2018）、滞留から逃れて再び移動を始めたり、場合によってはそこを集落や町へと発展させたりする。

ウォルターズによれば、移動の経路こそ強く生政治の働く場である（Walters 2015）。移動の物質性をみることは、人びとを移動させ、停止させる物理的構造へと介入する政治経済的な力についても目を向けることになる。本研究では、移動の実践を観察すると同時に、移動とは図と地の関係にある滞留にも目配りをする中で、移動現象の周縁におかれた人びとの声もすくい上げることになるだろう。

今後の見通し

本共同研究は、難民や観光といった現代社会に顕著な現象から、遊動民や生業活動など「伝統的な」やり方で、広義の移動に関心を持つメンバーから構成される。またそれぞれが対象とする移動方法は、徒歩や騎乗から、自動車や船、鉄道などさまざまである。世界各地で調査をおこなう各メンバーの事例を、地域・移動背景・移動手段の3つを軸として比較し、そこにみられる共通性と差異を考察することを基本方針として研究を進める。

本研究の展開は、グローバル化や輸送インフラが人びとの生を同質化するという一般的な観点に抗して、さまざまな地

域の人びとがそれぞれ独自のやり方で移動している姿を浮き彫りにする。加えて、類似する機械装置に媒介された移動も個々の文化や環境、身体に応じてまったく別様の物質性や意味を備えうるという観点は、技術中心的な開発計画に対して、ローカルな文脈に根差した多様な「発展」のあり方を考える手掛かりともなろう。

この共同研究がどこへたどり着くのかはいまだ未確定ではあるものの、また本誌にてわれわれの探究のプロセスと成果を報告できれば幸いである。

参考文献

- アーリ, J. 2015 『モビリティーズ—移動の社会学』 吉原直樹・伊藤嘉高訳, 東京: 作品社。
- ハミラキス, Y. 著, 村橋勲・古川不可知共訳 2018 「強制移動と非正規移動の考古学」『現代思想<特集>考古学の思想』46（13）: 81-100。
- Walters, W. 2015 Migration, Vehicles, and Politics: Three theses on Viapolitics. *European Journal of Social Theory* 18(4): 469-488.



乗合ジープとぬかるみ（2018年9月16日、ネパール・ソルクンプ郡）。



山間部に開かれた飛行場（2018年9月5日、ネパール・ソルクンプ郡）。